ラテンアメリカ都市物語
＝第10回＝

サンパウロ ささやかな醍醐味を味わっておきたい

細川 多美子

先日、市内の渋滞地区を車で走っているときに、バッサバッサと黒い塊がビルのてっぺんの角にとまるのを見た。あのバランスの悪い不器用そうな鳥は、と思ったらトゥカーノ（オオハシ）だった。奥地へ行けば比較的たくさんいるが、サンパウロの喧騒の中で見られるとは思わなかった。

これはパンタナルのトゥカーノだが、サンパウロにもいた
（写真はすべて筆者撮影）

そのちょっと前、やはり市内の高級住宅地の路上にリス状の小動物が寝て（気絶して？）いた。車に轢かれては、と道路わきに寄せようとしたら、飛び起きて庭木をするすると登って電線を伝ってどこかへ消えていった。サグイと呼ばれるマーモセット系の小さなサルだった。

以前、家の台所に置いてあったパパイヤにくちばしでつついたような跡がついていて、庭から小鳥が入ってきてついばんでいるのかと思ったが、食い散らし方が下品なので、数日間様子をみた。漁っているのは夜中なので、害虫駆除会社を呼んだ。犯人は都市に巣くう一種のドブネズミだった。よくあることらしいが、ガスコンロの下に住み着き、夜な夜な果物を漁るのだそうだ。しばし共存していたかと思うと、少しもうれしい話ではなかったが、このネズミが夜行性でほとんど目が見えず、果物ばかりを食べ、つがいで住み着かれると一気に子どもを産んで……という話を業者から聞いて、ぞっとしながら少しだけ楽しかった。

ところで、トゥカーノはブラジルのシンボルだが、国鳥は2002年の法令でサビア・ラランジェイラということになった。これは少しも珍しくない鳥で、小鳥というにはガタイがよく、イペーの花が咲く春先によく鳴く。ピーヒョロピロピローピョロピーヒョロピョロローと真似のできない鳴き声で朝方から賑やかで、真似ができないだけに聞き入ってると目が冴えて眠れなくなる。この鳥がここ数年、うちの狭い庭の木に巣を作るようになった。鳥はバタバタと嫌がるが、中を覗くと卵がコロコロ、あっという間にヒナを孵していなくなる。

毎日毎日渋滞と排気ガスと埃の中を通勤しながら、どうしてこんな所に好き好んで住んでるのかなぁと、最近思い始めた。政治が悪い、経済が悪い、教育が悪いといっても、自らの意志で選んで住んでいる手前、泣き言を言っても同情してもらえる立場ではない。1度ならず空き巣にやられる、車の窓を割られてバッグを盗られる、買ったそばから物が壊れる、平然とついてくるウソに騙される、自分の罪を認め

庭で巣作りするブラジルの国鳥サビア・ラランジェイラ。右はそのヒナと卵

ない人に翻弄される、一所懸命働いてもごっそり税金を持っていかれる。治安もモラルも国家の制度も文句のつけどころ満載のスリル満点だ。

今後選挙の結果にもよるのだろうが、「今のブラジルは船頭を失った船、政府はないも同然、世界情勢に関係なく、ブラジル独自の悪要素で状況を悪くしている。これはブラジル史上最悪ともいえる低迷加減で、なかなか好材料が見つからない」と、サンパウロ大学の経済学部人気一番のシモン・ダビ・シルベール教授が言っていたので、ブラジルの悲観ムードはあながち私の生活感情的なものだけではないと思う。ついでに教授が言うには、「今選ぶことは“ノーリスク”。リスクがどこから噴出してもおかしくないので、しばしじっとしているしかない」のだそうだ。選挙によって方向性が好転しても、実際に動き始めるまで時間がかかるだろうとのことなので、とりあえず日々が明るくない。

だいたい私は30年くらい前にブラジルという国をなんらかの形で把握したいと思い留学を決め、OLをやめてパラナ州クリチーバで1年を過ごした。モラトリアムのつもりで期限付きの気ままな生活を満喫して帰国し、「日本で社会の奴隷になる」予定だった。当時私はMPB（ブラジルポピュラー音楽）のあるところ、ミュージシャンがいっぱいいるところに住んでみるのが夢で、帰国を前にほんの少し残ったドル札を使い切ろうと音楽の都リオデジャネイロを目指し北上した。その途中、サンパウロは大都市だし、友人もいたし、で寄ってみた。結果から言うと、そのままリオにたどり着かずにサンパウロに沈没した。

その当時は、今ほど空気も重くなかったとはいえ、何がそんなに魅力的で住み着き、今もくじけずここにいられるのだろうか。

「サンパウロへ遊びにおいでよ」と日本の友人を誘って困るのが、「何か面白いものある？」と聞かれることなのだ。旅行者にキョーレツなインパクトのあるものがない。ビーチはないし、自然は少ない、歴史的建造物、文化財、博物館、美術館、公園、通には面白がってもらえるが、すばらしく有名というものではない。ポルトガル語博物館は火事で燃えてしまったし、国立博物館は長い間閉鎖中だ。

かつて日本語によるブラジル情報誌を編集していたときに、サンパウロを特集した記事がある。基本的にブラジルに関する記事は、断定的に書くと落とし穴にはまるので、語尾を濁して書く努力をしている。時間がたつとやっぱり何か違う事実がわいてきて、浅はかな自分がいたたまれないので、過去のものは心の底に葬っているが、今回はよっぽど困ったので取り出してみた。冒頭に、「人と車でむせ返るようなサンパウロの町。とりすました大都市のイメー

ブラジル最大のビジネス街パウリスタ大通りに咲くイペーの花

ジが、リオやサルバドール・ファンの観光客に「サンパウロはブラジルじゃない」などと思慮の欠けた発言を呼び、1千万都市の余裕がそれを甘んじて許しているが、これだけ雑多にして巨大な人口を抱えビジネスの中枢として機能している都市に魅力がないわけがない」

とあり、魅力を語るのに苦労のさまがうかがえ、1999年の当時から今も引き続き困っている。

けれども留まってしまった理由を考えると、理論ではない自然な（と言っておきたい）理由があった。

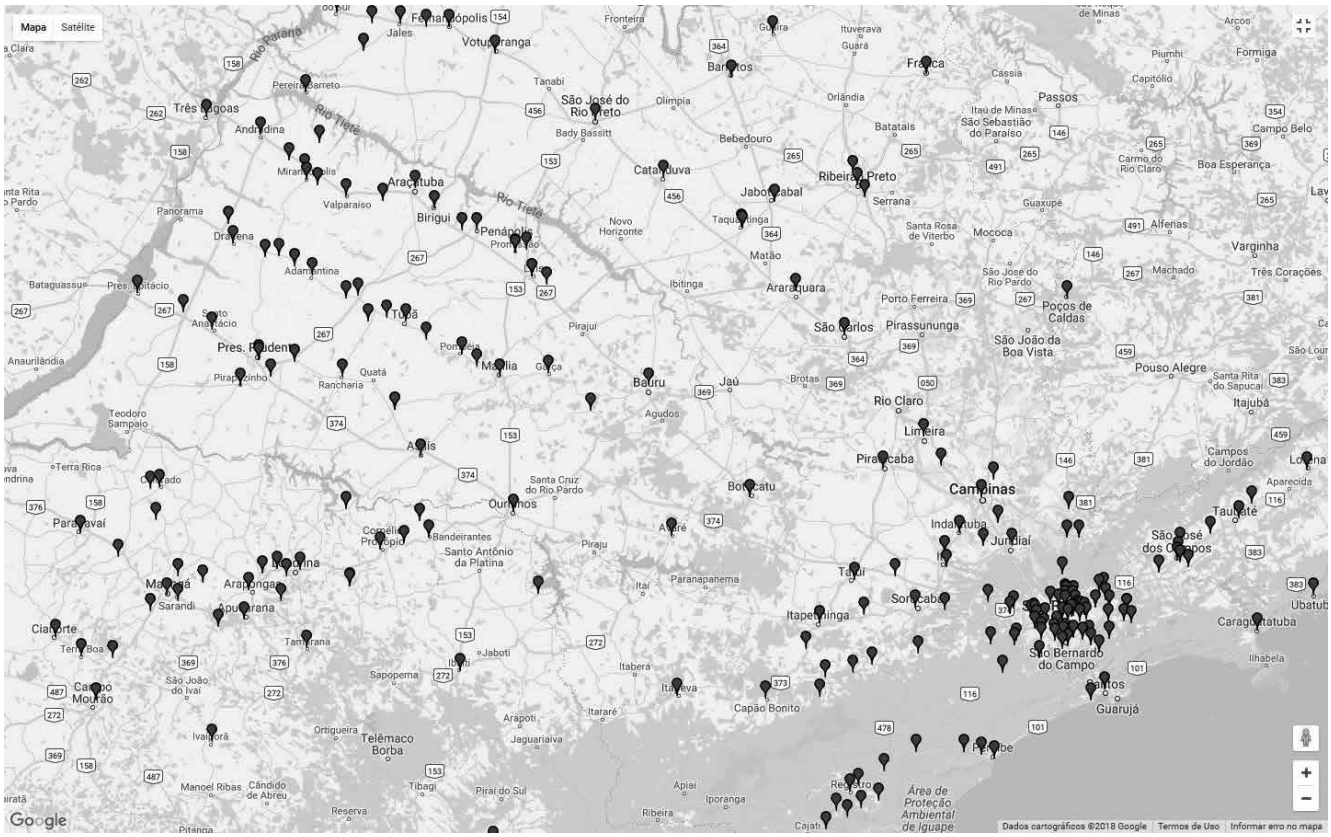
情報を日本語で得ることができることは最大の強みだ。邦字新聞の存在と日本語をしゃべる日系人のおかげで、自分の拙いポルトガル語能力ではカバーできない細かい情報を100倍速く100倍の量を入手でき、日々の活に苦労しない（そのかわりポルトガル語は意識を持たないと上達しないし、情報の偏りも否めない）。

和食に困らない。郷愁を埋める程度には食材もレストランもそろっている。今やスシもラーメンもサンパウロの名物だ（欲を言うとどうしてももう一段上を求めてしまうし、道をそれた日本食の行方が少し心配ではある）。

一通りの遊びや文化活動に事欠かない。グルメ、夜遊び、ショッピング、ライブ、展覧会、映画など、どこで何をやっているか把握できないくらい退屈しない（もちろん東京には及ばない）。

サンパウロ市は人口約1,200万人、ブラジル全体のGDPの10%を担うブラジル最大、南米最大、南半球最大の都市だ。世界196か国の移民がいるという。国内の移住も激しい。オリジナル一世だけでも多様性といえるが、二世、三世と世代が進むとさらに多様性の幅を広げていく。日系で考えれば、ブラジル人でありながら日系性を保つそのバランスが様々になり、それぞれの価値観もバラバラ。日本人が好きな「たったひとつの正しい答え」として「同じブラジル人」としてくくるには、たくさんの事実を抹殺しないとできない。ふと思いついたが、もしかするとこの多様性こそがサンパウロ一の魅力といえるかもしれない。

たとえば、今私の家はリフォーム中だ。大工はサンタカタリーナ州出身のドイツ系で、若いころ仕事を依頼され一時的にサンパウロへやってきたが、次々仕事が舞い込み、ここで伴侶も見つけてしまったので故郷へ帰れなくなった。子どものころ、故郷の学校には同じクラスに日系人がいて、仲が良く互いの



サンパウロ州内の日系団体所在地（サンパウロ人文科学研究所作成）

家を行き来していた。この日系人の親は日本からの移住者一世だ。大工が言うには「彼らは目標をしっかり持ちそれに向かって努力をする。俺は学んだぜ」。もともとドイツ的堅実な性格は日系の手堅さと融和したのか、彼の几帳面さは筋金入りだ。が、その几帳面さについてこられる助手がいないのだそうで、工事は一人でコツコツ、素晴らしい仕事をしてくれる。かくして家のリフォームは1年たっても終わらない。

2年くらい前の話、パウリスタ大通り裏に、おしゃれなフランスパンの店ができた。パン屋の近代化はここ数年の傾向で、今もおしゃれな店が次々開店している。その昔は駐在員の奥様方に「ブラジルにはおいしいパンがない」と言われたものだが、今はそんなことも言われないと思う。そのフランスパンの店は粉も職人もフランスから取り寄せた本物で、私たちは大変喜んだ。ワインもアルゼンチン製が簡単に手に入るようになり、宴会が華やかになった。だが、その店はあっという間につぶれた。パンが売れなかったわけではないらしい。職人がブラジル人女性と駆け落ちしたのだという。面白おかしく語られる単なる街のウワサと思われるだろうが、ウワサの元はこの店の工事を請け負った内装業者で、それがたまたま日系の知人だったので情報に間違いはない。

アラブ系ブラジル人のパーティーにいたポルトガル系ブラジル人にいきなり「アナタモワタシモホトケノコ」と話しかけられびっくりしたことがある。本人が言うには意味はわからないが、子どものころ通っていた教会の牧師に習ったということだ。

あらぬところに日系人が登場するようになり、サンパウロの表向きの顔の下にはどんな根が張り巡らされているのか予想がつかないところが楽しい。

日常から味わうささやかな醍醐味。

日系社会についていうと、サンパウロ人文科学研究所の調査によれば2018年現在、ブラジル全国に存在する主に文化協会や文化体育協会と呼ばれる日系団体は430あり、サンパウロ州内で246、サンパウロ市内だけで実に40団体が活動を続けている。どの地域にあってももはや浮いた存在ではなく、ブラジル社会の確実な構成要素になっている。

この調査のために、ブラジル中を旅する機会を得て、ブラジルも変わったもんだと思った。どこへ行くフライトも機内はほぼ満杯、朝の空港はグァルーリョスもコンゴニアスも大ラッシュ。初めて聞く名の町に空港ができていて、いろんな地域で最寄りの空港が変わっている。海岸線や町の中心部にはスマートなビルが立ち並び、次々できるショッピングセンターはどの町へ行っても同じパターン。地方都市が大都市の風情を帯び出した。どこもサンパウロ化してしまった。

“ブラジルっぽくない”から語りにくいサンパウロ規格が全国規模になったら、ささやかに味わってきた魅力は今後どうなっていくのだろうか。ささやかではないブラジルの王道？「最もブラジルらしい町は間違いなくサンパウロです」と今から先に言っておきたい。

（ほそかわ たみこ　サンパウロ人文科学研究所常任理事。サンパウロ在住）

『ウルフ・ボーイズ
ー二人のアメリカ人少年とメキシコで最も危険な麻薬カルテル』

ダン・スレーター　堀江里美訳　青土社
2018 年 3 月　405 頁　2,400 円＋税　ISBN978-4-7917-7050-2

1986 年にテキサス州のメキシコ国境にあるラレドの貧しい家庭に生まれた米国人少年ガブリエル・カルドナは、高校時代はアメリカン・フットボールの選手として人気があったほどだが、高校をドロップアウトしささいなことからメキシコに数多くある麻薬犯罪組織の中でも最も危険なカルテルと言われる“ロス・セタス”に関係し、組織の「仕事」として殺人を重ねる中で次第に頭角を表すが、ついに仲間の少年とともに逮捕され、ティーンエージャーゆえに実質的な終身刑に服することになる。米国の青少年がメキシコの麻薬組織の手先になって重罪を言い渡されたことは、米国民に衝撃を与えた。

一方、メキシコ生まれで米軍勤務の後にテキサス州の警官になったロバート・ガルシアは、米国政府が自国内の麻薬に対する根強い需要の存在には無関心で、大物犯罪者とは司法取引で軽い罪にしながら、末端の密輸や販売に携わる小者の逮捕数や氷山の一角である麻薬・薬物の押収量を誇るだけの取り締まり、捜査費用を麻薬マネーの押収金に依るなど、当局にとっても終わっては困る麻薬戦争は、勝者のいない壮大な捏ち上げだと疑問をもっている。

本書はこの立場の相反する二人の人生と生き様を丹念に追いながら、麻薬取り締まり、密輸、贈収賄をはじめとする汚職の歴史、それに因って拡大している米・メキシコ国境地帯の矛盾や不均衡、未だに出口が見えないメキシコの麻薬戦争を、麻薬組織の末端で利用された若者とかれらを追う取り締まり側の双方の姿から描いている。著者は『ウォールストリート・ジャーナル』紙の元記者で有力紙･誌に寄稿しているジャーナリスト。

〔桜井 敏浩〕

『ノモレ』

国分 拓　新潮社
2018 年 6 月　210 頁　1,600 円＋税　ISBN978-4-10-351961-4

アマゾン河上流のペルーのマドレ・デ・ディオス川の密林の中に住むイゾラゾ集団が他の先住民を襲う事件がいくつも起きた。ペルー政府の文化省は隣国ブラジルの政府部門でイゾラドの保護活動を続けてきた専門家メイレレスの助言で、イゾラドと言語が近い部族から人材を選び接触を図ることにした。選ばれたのがイネ族の若きリーダーのロメウは、“ノモレ（仲間）”としてイゾラドとの接触を試みる。ロメウは既に村長をしていた時の 2013 ～ 14 年の間にノモレと信じるようになった人々と接触経験があったのである。2015 年 7 月にペルー政府が設けた「監視・統制拠点」で仕事についた数日後に彼らを初めて目撃し、ペルーアマゾン流域の診療所勤務を続けてきたメンディエタ医師の協力を得て、ジャガーに襲われ怪我をした少女のいる対岸に渡り治療したことから一家族の集団との接触が始まり、以後言葉が通じ合うロメウの尽力でしばらく交流が続いた。

ペルー政府も観光振興の意図もあったが､イゾラドとの遭遇･接触に関するプロトコル（指針）を制定した。しかし、観光や漁猟を求めて彼らの居住地域に入り込む“こちら側”とのトラブルが増え、衝突や殺人、持ち込まれた病原菌により彼らの数は減ってきたと推測され、ロメウによる接触も途絶えたが、かつて接した家族は森のずっと奥で静かに暮らしているという話しを聞いたのがせめてもの慰めだった。

NHK のディレクターで､「隔絶された人々イゾラド」「最後のイゾラド 森の果て 未知の人々」等の番組に関わり、『ヤノマミ』の著書もあって、アマゾン流域の先住民族にかねがね関心をもっていた著者による「私にとってのロメウの物語」。

〔桜井 敏浩〕

『グアテマラを知るための 67 章【第 2 版】』

桜井 三枝子編著　明石書店
20018 年 7 月　384 頁　2,000 円＋税　ISBN978-4-7503-4689-2

グアテマラは 1996 年の和平協定により 36 年間に及ぶ陰惨な内戦が収束され、その後の混乱期を経て近年急激な変貌を遂げているが、マヤ文明、スペイン植民地時代、近現代を経て現代の政治・経済の状況、紛争の後遺症を越えて先住民等との多文化主義、宗教・伝統・言語・文化・芸術という視点から、グアテマラを総合的に理解できるように工夫された総合的な解説書。

マヤ以来の宗教、文化、言語など伝統、歴史的背景を知るとともに、近年のプロテスタントの布教の目覚ましい拡大とカトリック改革派の対抗、殺人犠牲者数で世界トップ 10 に入る治安悪化の主因の一つである青少年組織犯罪グループ「マラス」対策、米国への移民の増大、マキラドーラの発展と韓国系アパレル工場などで見られる低賃金等の労働問題、台湾と外交関係を維持する中で中国経済のプレゼンスの拡大など、新たな注目すべきテーマを加筆している。巻末には 16 頁にわたる内外の参考文献リストも付けられている。

エリア･スタディーズ･シリーズ 164 点のうちラテンアメリカ 19 点中の最新刊で､国際関係、政治経済、歴史、民族学、考古学等の多岐な分野の研究者や在住経験がある現地事情に通じた 35 名の執筆者を動員して、2006 年に出版された『グアテマラを知るための 65 章』を現状に即して追加補足したもの。

〔桜井 敏浩〕

『ラテンアメリカ所得格差論 ー歴史的起源・グローバル化・社会政策』

浜口 伸明編著　国際書院
2018 年 8 月　256 頁　3,500 円＋税　ISBN978-4-87791-291-8

ラテンアメリカ諸国は植民地時代から富と権力の偏在、先進国への一次産品輸出、1930 年代からの政府主導工業化、80 年代の政治的民主化とインフレ、国際収支危機に加えて構造的問題として所得格差を抱えている。

グローバル化した市場経済の恩恵を受けようとし、経済自由化が所得分配にどのように影響するか、所得政策が負の影響を受ける人々に対するセーフティネットと経済社会の安定を目指す開発政策が社会の複雑な相互作用が引き起こしている発展停滞の現状を読み解くため、序章と 6 編の論考を載せている。

まず第 1 章の「所得格差問題から視る意義と意味」では、現在の所得分配状況をデータで確認、構造的問題といえる所得格差の要因を考察し、第 2 章「ラテンアメリカにおけるグローバル化と所得格差の関係」をグローバル・バリューチェーンとの強い統合を特徴とするメキシコ・中米型とコモディティ輸出を通じたグローバル化の南米型に掘り下げて分析している。第 3 章「所得分配と社会政策」は条件付き現金給付を副次的効果も含めて、第 4 章ではラテンアメリカで多様な形態で展開した「格差社会に対抗する連帯経済という選択」を、最後の 2 つの章では「メキシコ・中米型」からメキシコ、「南米型」からブラジルの事例を取り上げている。NAFTA の参加と依然大きな割合を占めるインフォーマル部門が所得格差増減にもたらした影響、近代的な経済と伝統的な経済が並立する二重経済が色濃く残るメキシコ、歴史的に富の偏在が形成され 2000 年代にはコモディティ・ブームが貧困層にも恩恵をもたらし所得分配が改善し労働市場の構造変化をともなったブラジルだが、依然格差の絶対的水準は高く、コモディティ・ブームの沈静化、PT（労働者党）政権の汚職問題での支持失墜など政治的混乱も相まって今後の動向は不透明化していることを明らかにし、グローバル化や社会政策の拡充の下でも社会における格差を悪化する可能性について指摘している。各論考のどれもが示唆に富んだ研究書。

〔桜井 敏浩〕